トップの素顔

The president's real face

vol.14

建設業の「コア」を担う存在に

福井コンピュータホールディングス株式会社

代表取締役CEO

佐藤 浩一 氏

Profile

昭和38年福井市生まれ。平成10年福井コンピュータ㈱（現　福井コンピュータホールディングス）入社後、横浜営業所、千葉・横浜営業所長、関西支社長を歴任。平成24年7月に福井コンピュータアーキテクト㈱取締役営業本部長、平成29年同社社長に就任。令和４年2月に福井コンピュータホールディングス㈱社長、令和5年6月同社代表取締役グループCEO、令和7年4月同社代表取締役CEO兼社長執行役員（現任）。福井商工会議所人と組織の価値向上委員会委員長のほか各種公職を務める。

DATA

創　業：昭和54年12月　**本社所在地**：福井市高木中央1-2501
電　話：0776-53-9200　**従業員**：551名（令和８年２月現在）

普段、垣間見ることが出来ない福井商工会議所の議員の素顔を探る「トップの素顔」。今回は福井コンピュータホールディングス㈱の代表取締役ＣＥＯを務める佐藤浩一氏にお話をうかがいました。

「音楽に没頭した学生時代」

福井市生まれの佐藤氏の原点は母の勧めで始めたピアノ。これを機に幼少時から音楽に勤しむ。宝永小学校に新設された鼓笛隊において「背が高く手が長い」という理由から音楽の先生にトロンボーンを任される。そこで楽器の演奏に夢中になった佐藤氏は、進明中学校入学後も強豪の吹奏楽部の活動に明け暮れた。一方で、この頃に憧れたのが「エレキギター」。高校では郵便局のアルバイトで苦労してお金を貯め、念願の1本を手に入れた。

青山学院大学への進学を機に上京した佐藤氏。ライブハウスでの出会いを通じて他大学の仲間と意気投合し、ハードロックバンドを結成。ギター・作曲・アレンジを担い、本気でプロを志すために大学中退を決断した。オーディションなどの活動資金を稼ぐために塾・予備校講師として教壇に立ち、中・高生向けの日本史や国語を担当し

ながら約8年間「バンドマン」と「講師」の二足のわらじを履き続けた。

節目は23歳の時に受けたCBSソニー主催のオーディション。中野サンプラザでの最終選考まで勝ち上がったが、そこで上位に受賞したバンドの演奏を目の当たりにし「メンバー全員が格の違いを痛感した」と振り返る。これをきっかけに26歳の時にバンドは解散した。一方、予備校講師の仕事は夜型のシフトで、帰宅は深夜にまで及ぶ。当時既に結婚しており、子供の成長につれ家族との時間がすれ違っていく不安が募った。そんな折、大学の先輩からの誘いを受け「小学館プロダクション」へ転職をした（現・小学館集英社プロダクション）。ドラえもんやミニ四駆などのキャラクターのグッズをはじめとする版権営業、幼児教室・英語教室の全国展開などの業務で、営業マンとして物事を伝える力を養った。

人生を変えた父の一押しと営業時代

34歳の時、父の体調悪化をきっかけに帰福を検討し始める。元銀行員の父から「将来の成長性が最も高い」と勧められたのが福井コンピュータだ。それまで進路に全く口を出さなかった父が珍しく熱心に背中を押してくれたことがふと気になった。長男としていつかは福井に戻ろうという親孝行の思いも重なり、入社試験を受けた。

トレタスグリーンホールでのライブイベント（2024年）

畑違いの世界へ飛び込んだ佐藤氏を待っていたのは、最新型PCと通信環境、そして当時最先端の3次元CADだ。「福井の企業がこれほど高度なソフトを開発していることに驚き、すぐに夢中になった」と回想する。その後、大手ゼネコンやハウスメーカー、工務店、設計事務所などの顧客の前でパソコンを直接操作して見せる実演型営業で顧客を増やす。3DやCGが珍しい時代にボタン1つでそれを自動作成する。デモ画面にかぶりつきになるユーザーの姿が快感だったと振り返る。

入社当時「2年程度で福井へ戻れる」という言葉を信じ、横浜営業所で営業マンとして配属されたが、気が付くと福井へ戻ったのは13年後。その間に父の病気も完治し、急いで戻る必要がなくなったことも背景にあった。営業成績を順調に伸ばし、営業所長、支社長、営業統括執行役員を経た経験で全国の現場感覚とマネジメント力が養われた。2022年にグループ全体のCEOに就任後は、数年前から準備検討していた、同社筆頭株主「ダイテックホールディング」との経営統合に向けた交渉や調整に邁進。統合方法やリスクヘッジなど検討材料が多く「これまでの業務と比べ物にならない程レベルが高く、緊張感のある仕事」とし、現在も継続して陣頭指揮をとる。

建設業を花形産業へ

同社はプロバスケットボールチーム「福井ブローウィンズ」へのスポンサー活動をはじめ、地域との共生にも大きく関わっている。また、北陸新幹線福井開業に合わせて管理部門や社長室などを福井駅前の「ふくまちブロック」へ移転。新オフィスでは違うフロアの他企業との交流や、挨拶が行き交う新たなコミュニケーションが生まれている。まちなかについて「一過性に終わらず、継続的な人の導線があると実感している」と印象を語る。

佐藤氏が見据えるのは、人手不足や高齢化、資材高騰といった課題に直面する建設業界のこれからだ。単に工事を行うだけでなく、建設情報を集約し、AIやXR、ドローン、ロボティクスなどの先端技術を駆使して、建てる前に最適解を導く「予測型産業」へと進化させる。そこに、同氏の描く未来像がある。「過去を振り返るだけでなく、蓄積された情報を活用して効率化や事故防止を実現できれば、建設業はより魅力ある産業へと変わっていくはず。当社がその中核（コア）を担う存在であり続けたい」そう力強く語った。

休日は高校の同窓会を機に再開したバンド活動や、ギターを用いた楽曲制作が10年以上続くライフワークだ。地元経済人が集う音楽イベントにも積極的に出演し親交を深めている。会食が続く日々でも、ランニングやウォーキングによる自己管理は怠らない。「福井を盛り上げたい」という熱量を胸に、佐藤氏は今日も、故郷の未来という大きなステージを全力で駆け抜ける。

今も演奏で使用するESPのHORIZONをはじめとするギターコレクション